六百番歌合 三

古今將家六百番歌合卷第三目錄

秋

初雁　七夕賛　稲妻　鶉
野分　秋雨　秋夕　秋田
鶴　廣澤池眺望　萩
秋夜　九月九日　秋菊　寄秋

尊經閣文庫

左大將家六百番歌合卷第三

秋

一番　　述懷　　雪邊ノ

左　持

唐衣ひとへ重の帝にそ扶桑の秋をたのしきつる

右

經家ノ

秋きぬと思のいろにさしみゝるまきの板屋をとせさりけり

左あ[illegible]云左歌可新中之事

左方申云すゝさのとゝくさくひさしやうまや

やさこゑれとゝもいとくさくゝ

判云左歌しとをるゑやうあをあきのうゝ衣ひとへ

いふるさとをわけくるうゝ扶桑秋をたのしれはこと

なるとりんぜもひあうて袷らんたる事
目まさやうふといなる事此心ばいへれをるまそ
秋涼しさをなせさらはけるもてゆくうきをゆまを
りつれまさまちともやしまるれうくや

二番

左　弘昭

これはのてる日や新とのあ〜あん今物吹風の秋よたゝまぬ

右　勝　中宮権大夫

秋とのさみてる日波最と花目めけを寄りれ秋乃上り後
たあや云りさ吹風の秋とたゝをぬとこそいを海りられ
左方〜云たる事上白うう紅の心をあゝをれめられ下白
なにゆへとゝもみしを

判云左今物吹うなる秋おしゝきあの秋とたゝをぬとて
たの他可宜や右乃てる日と最とおのけをとりんぜハ
大方お景の題を必たもお景歌賞すへしとゝ花月景物
らひさゝお景ふうゝを映源と貴をわとも不可及疑事
まを仍番勝を秋乃うを風優なるうや勝とをへし

三番

左　持　之家朝臣

秋風の吹もはゝすゝぬ海ゝ手すあ桑はつれ事〜花桂人秋の風

右　歌源

秋さてもまさひとんなる衣をふいわをもあ桂ののをう吹きれ
右方〜云はよらあといあるわくゝを海ゝとう志ゝう
うきゝを

左方申云いとりもぬ袖の露とよめれはすこしいくときこゆ
ほむして吹秋乃もつの世とよめるもいと面白くきこえて
ともす又彼是の心詞おなしかりきこしくや
判云両首共左右の方人乃申旨左方乃理よらぬ事ハなけれとも
なほさん右歌ハ心その心して心けといへるもすあし
さいとをきされすやさあらん又彼是の心をもこし余し
かうんも詞の本意またりふ色かうぬよしされの作ひ
かやしぬぬいふを此体うひ持と侍へくや

四番

左　勝　兼宗朝臣

いつしらさもかくれ右手にわそてまつさよ露ち秋の日数を

右　隆信朝臣

なとにのをあるまをとそへてけのなれ袖まさるまれ秋乃初風

右方申云左歌ハ秋のはしめを余しまふ事おもうかひなし
けしきふあの歌ハ定すりまて秋乃はしめ共あけさ
やうりさこ由いへく

陳云左秋乃はしめを定てあつ支相なれ炎暑剰おてらも他
連れ此詞とて秋はしめ初つしせさりなんたらん不可為
歌又三伏乃後伏を秋初也

左方申云右歌ハ無殊歌

判云左歌にしけてといへるいふやさあえ侍連と彼是乃
歌をいやうりようハ侍らめ右をとらりあとれにと
そふするの秋風袖うしらるれけらん事さいしても左
乃勝ともへし

五番　　左　勝　　定家朝臣

秋ぞてもなほとゞまるつゆ草の
はつかの花の　　右　　寂蓮

最後まで残るつゆやつゆ草の
はつかの花の　　秋の中一番の勝

判云右方春くれて夏をむかへ
夏人を忘れぬ秋去て冬のふるゆき
事やうにいはんかたのまさるべきや

六番　　左　持　　女房

うらよすがら波もあらぬ
はつかの川　　右　　信定

秋あさぢ日新しかつそのあまの
右方花月のよろしきをもとめ難を秋のうちの
花方中に秋あさぢ月おもしろく
判云花月波も秋のなをいかにかはるべ
と抑詞かとてそれ月を秋なのなをいかにかはるべく
よめるを今すゑ出玄と物のけを中にも漢詩と
すゑ信よりのくや俗うん右方さぢ二番のたすや
俗詩の事は同じ事俗と秋あさぢにくせ
俗らん事は難も勢かとうぬ物をなを俗
みしかをを除情之外は俗にしかすを可為持

七番　　左　巧　　貴

左　勝　　雪隠つ

あと毎日新とうつをと七夕ぬあ〻瀬をたゞ一あすの川波

右　　経家つ

袖をこれをふ七夕をまつ夏ぬ行く初あく波をそうたゝら年

右方ハ云左歌一無費心又あ〻ふをたゞ一もむを子

左方ハ云右歌ことに費心ゆゑ〻

判云七夕のうゝを奥風ふ年ふひとたひをりひ初恒を

めう数ぬ数をとうふ見て行ふと今の左歌をあ〻瀬

左ゆしといふ思ふあ〻ふ似ふを又新をうつをふ

なゝハすつれふもふとうなのらん右をたゝふ云すや

侍らんとゝ心ををを左勝ゑくや

八番

左　勝　　邑宗朝臣

吳竹ふ思ふ秋のをゝ数ゆけてつのふ〻ふ星あひのそゝ

右　　中宮権大夫

九重ふをふつれをを七夕のゝ一数やうけゝやみる

右方ハ云ふつれ初すや星合のをゝ今すゆ

左方ハ云毎年俄を年ふひとゝをなくてゝ一数

やいをゝつく

判云ハ侍るほとやあひのをを後ふとうけゝすゝ

もをそゝ年侍らゆゝ一数ぬ新ハけるやゝ侍らん

九番

左　持　　宗家朝臣

七夕をまつふすことをなにはなりてあふとをしうひひくめ

右　　澄信朝臣

ふるはれるひものーつ織女うり思ふおりひとをにたまをうや

右方ーー云左歌ーを持題

左方ーー云右歌ーを持題

判云左ーーと成ーて心とひのせたを焼物れるひ思ひ

とたまなと名秀白小まつられてゆめう持なくすや

十番

左　勝　　定家朝臣

秋ことにしぬはあるのさ衣涼て芝ゆる庭のとは史

心　　家澄

あかつき庭のとり史の涼て夜や涼ゆるんかしあ部のを

右方ーー云左歌ーを持題

左方ーー云右歌ーを持題

判云夜や涼ゆるんかしあひのをとりへ孔を優うゆるる

をのとつ白あかつきの文字ーなくゆきに事ー非左を部

なきーゆめう勝へ文うそ

十一番

左　勝　　女房

かりあひのをれ光となる翅を弁の庭よてををもーー史

右　　信定

織女を出うへ月玄の上うひとをてうれしゆらん

右方ーー文左歌ーを持題

左方ーー云費心かをなり又を乃上ーを出上やをあ孔

ちりさかなるやうにさこそ
判云上ちと上をありさかまりなく八伯うんさうの所さ
るとちをいふのふめる伯らん左の那は右のつれむも
ひをのなりハ左又勝ふとうの伯なれ

十二番　左　勝　弘昭

ちるめをく生合のやれを所ちとへてよとちをや
右　蓮
七夕の逢衆代庭うをくしとのあるをふりをさうふれ象
右方ハ云さたあ逢きくよりうを
左ハ云さうふるふりうり出来候をを
判云さうあれのいををしひうん秀句れまうり出来よ

ちうをあめれちるめをくをちきくふくうすや左
のれれをるなと勝へくや

十三番　稲妻　左　勝　定家朝臣

新勅をを狩夏神の御代上ゐるれてもうとれをひの稲つさ
右　後信朝臣
むををのあををるをひ稲妻ハ夏のなるをりの
左ハ不難ハ
判云左狩夏神のなをりんれむよるをうやらんた
むををのやを逢やをあるををなをいるる系をくく数
ちを伯狩よ又すををちををりふうをりりといへれ上下わ
不叶さらをらんをひの稲妻ハ四をくやらん

十四番

左　持　弘昭

いなつまの光よりさやかなる雨ふる夕やみの空

右　道氣

さみだれの山田の畦に苗とりてみりる稲妻となとうみ連

同前

判云左方上句をよろしくみし侍と雨中の景をいかくは

う侍に只雨の中なる家ふるとを今いへ所をやはらんきく

なれてもなほ侍るぬ必行右筆あ連も上句を常の

かきこそ侍ほとれりる稲妻又ことあるこらをやはらん

同かとの事なる事

十五番

左　指　兼宗朝臣

秋の夜ふ月くたひをる雲照すとしいるとれ家ふ夜と孔稲妻

右　信定

山のをれ物まる雲れをし雨ふるとを雨の打ものに西ふ稲つ方

右方ハ云左筆不殊

左方ハ云右方あ云あ連ふ雲を雨とを雨行要ル

判云左ハくたひをの殊光しをを奇う思ひ出られ侍連と

筆ふ風よりくしそ侍めれた又とを雨そをとなる家

なくそ雲侍連と部ふらのくひろま雨の打ものふ侍連

少へなの打へをれあるされへしなと指なとかをくや

十六番

左　雲経

ちひろまの月ゆゑとは花ぞ思ひぬ新とみるとはいはつゝ

右　勝　　中宮権大夫

夕ぐれのうつろふよ野の玉笹ちる花ゆゑ人て思ひいかゝ

右左共不新中

判云あ首の玉笹ちる花ハ月ゆゑといひ右ハ夕ぐれのうつろふ

ひろやをいへ月ゆゑ夕ぐれ共ハ新とも可有ふ

ら新とはいへ雲やゆらんうゝ思ひぬ新といひ

殊不可有勝やゆらんゝ之をとゞめてハよろしく哥ゆゑ

以右可為勝

十七番

左　勝　　女房

ものゝやあまをゝる音のうゝねよいかゝ月ゆゑ花乃家

右　　羅蓬

をゝ花ゆゑ海の蓮を新清てゝくゝ雲とれらひいはつゝ

右中一云左寄　無新

左ハ云秋蓮花をゝ色ん事いゝ

陳云和哥頭ゆる長那よりゝられた秋を色ん事を行那ハ

判云左哥詞艶よみし侍るゝとゝなゝやをけく初句や

いはすゝ思ふ色ゝ侍らんハ哥ゆゑ侍ると哥

長艶ゝとゝ秋をゝけきゆと後きらん事いゝくは潘安仁

之秋興賦ゆる燈燿乃長階蘭と繁露と蟋蟀乃きりゝくを

打屏ゆゑとゝ人を朗詠集詩ゆゝ万黙水哥秋哥中ゝとゝ

侍也投左の多花乃家まさ花とゝ侍て

十八番

左　勝　　　　　　　　有家朝臣

風渡るあさちかうへの露にたにやとりもあへぬよひの稲妻

右　　　　　　　　家隆

むすへは風吹野への秋にたにやとりもさためぬ稲津まのかけ

右方申云、左歌よろしく見ゆ

左方申云、右歌雖似左方詞、作くみゆ

判云、両首の心詞已似たるにみえ侍るを、左はよひの稲妻といひ、右はいなつまの影といへることの替りはへるにや

以左為勝

十九番

左　持　鶉　　　　　顕昭

たかの子鈴もゆるされし狩人糸と鶉鳴あさ川乃原まきこふも寄之川

右　　　　　　　　寂蓮

秋といへはうつら鳴なり小萩原庵のあとまて荒まくのすれ

右方申云、左歌無別難

左方申云、鶉無衆望、又但字不審

判云、左は催馬楽のたつの子れ哥心をとりて只手本をもなく

鳴けしまいを手にすへ糸とくとくといひてあそひつれ両ま

きこふも寄しつといへる鶉ともとやとの思へはせる

まやなるらん又風情も無下にさし詞すやなるらん右歌も

歌しめさそて宿しぬる庵の辺と荒まくまのすら由荒可澄

右歌勝たるへし不承證枝之為左勝劣難決

廿番

左　勝　　　　　　兼宗朝臣

ちのや原吹くれ秋のタ暮うしみつ連をうつゝなくるを

左　經家つ

秋風をいとやすゝむタ陰くれあさちの下にうつゝなる

左方ハ云ひみくれといひなる詞不足

右方ハ云ゆ可然ハ之事

判云左歌ハ詞不足之由右方ハ心みつ連をなをよむ

為ハせるやあ月をうふるをてかやうによむへしと

なゝハ多なるうんしゆうんくあをれるをかをしう

いとめしみつ色かをそつくなをいふ事を侍うん

右歌ハ来句を優なるを秋風といふらんる歌の心歌

ひ秋春雪之躍ハ小殿ひ秋忠之為をうゆをする只をれ

くれをうをうひ時をぬるを波をうられ侍も

秋の殿を感するゆも侍らん風をいとひてをも涼をする

なゝハうゆらをに窮しをやを侍らん左可勝也

廿一番　左　勝　季經つ

タ風のをれくをれ原ゆくまくれ祢ゆあ連ぬるやうつゝ侍ら

右　澄信朝臣

風ハ吾宛の文ゆをるをうをゆうつゝ侍へ文殿人の弟ハをを

右歌ハ云左歌ハ紀歌

左方ハ云文ハ氣文をを病すや

判云左吹まくゆをとをを祢原あ連ぬるやををいへ珠不被

為勝ハ右ををうをつを

みを原遠振うゆ侍色くやを国ハ勝へ文ハをを

廿二番

左　持　五郎

夕顔をあてもまゐらせるまのさんにうつくしくなること

右　信定

うつくしき藤の離れあまたゆるとゝとのゆくへとをうつらぬ

右申云房のまの花不審事や

左方申云そうの風うちひらめきぬやうすや

判云花石類あれ雖爰を吸ちんり花をりひなれをとゝ云こ

以案房のまの文為乃事也をうの風のうさ又殊ゆ不及

那申花似花をうれりを花ハたのしくさらに房かれ

あてきまの下奥ゆれまさつをやゆ可為相也

廿三番

左　勝　女房

ひとりをむあのゆのさ松の下ゆ床をなるをて鶴のなり

右　中宮権大夫

秋風はなひくを花のゆゆ春やうつくの松をの面とられん

右申云花者を新

左方申云鶴の国ハ面され事ハあゝん根しよ也

判云うつくの松の面さ流事のなゝをなくとゆを新う

つをハ氣色ふうを作るめゝし花床をなるをて

人れれりをきてを勝侍るん

廿四番

左　勝　三家朝臣

月うをむ里ハ海ことれあまよるをうつられ床ををらふ秋風

たけの丈なりと為てかきれる言葉にうら吹や　羅達

右石は宜之也哉

判云あ前の右の風体せよ優うきまとしたるとたまうきの
れやかりこのれうなりているうう出玄ゆもやと
ゆうとまうかれれとをくやゆらんたのすれ白
まさかくや

廿八番　野分

左　勝　弘昭

萩の枝とをうむ康もうつ風の移たさか枝たのをうと

右　経家つ

とを見なれり枝のあうゆるをひさうをあやこかれ

右方ハ云あうつのつ風とりひあたまて野分れひきうんや
陳文野分の文左をいはをみしをあうつ風乃後うわなと
うたうさうかはてうあ源氏
左方ハ云野分乃風れうさかとよりる重要たうさう根
なり又下白常れ芳花
判云左帝牧たうのをうなりうんれ右風の所すやと命う
と上白より風の移れさまをさくちの氏帝八所なる
うて布衣乃人れ黒靴をくらんひらしあめれ右文節分
うつ白こかまんるうあも題なり左上下之不相似分のう
四月つ文うや

廿六番

左　兼宗朝臣

もゝ草の花もいかにかふらんあかなさけなの今物躰にや

右　勝　　　　中宮権大夫

吹みたれ野分の代のあはれをやもときさへなき花のいろく

左右共無指事之由申しや

判云左のあかな情なやとかれのし文躰と庶幾せらるゝすや右歌

吹みたれとをける源氏野分の巻の思出られて

艶ける様なるを候ふすやさしく左乃花も心のみとゝむ

花のやとさへなき家といへる同種の事にすやと存みし

猶ことに左のしく葉代かともはきけくや吹みたれ侍りて

右すおしまさるへきにや侍らん

卅七番

左　　　　季経卿

跡もなく今朝を野分に不感まかり左と浪にみえしもとゝる竹垣

右　勝　　　　寂蓮

思ひやれ我ひすてゝちるまさね野分する秋のきぬのいろく

右方申云まとふ竹墻をゝるまの

左方申云躰に紀する如何

判云左歌様を不遁と野分の気色をなどと躰代草ゝの荒家との

上なそ可細とす内の竹墻の損失之由を存之か事すや

右歌野分するを不可及難事すや我心までなしといへる

もあく浪あかりにふるへし左そいふも野分きのかい

なりけりや勝に侍へし

卅八番

左　勝　　　　定家朝臣

秋の宮ゐてうそうの風の秋はれやそ野辺きのあくるくなる

右　　信定

きりぎすの夜ゐ来る波ゐてふれ〳〵野ゐうゐくを演の殿
たの秋鮮なの作くくたるひまゆのぬる城中

判云左右舞人当位ゆのされる〳〵むゐ可被組但
左をうそうの風の秋のゐ思ふるしえるやゐらん右舞
作くくの詞を蟬脱可被賞なひきゐとをきてゆの〳〵野ゐ
ふとゐくゐる演風をゐ餘情すやゐらんとをみし作連と
秋左の上下れ詞宜ゐるうや可ゐ勝べ

廿九番

左　持　　女房

きりぎすふるもをれとをちし紫のゐを野辺きれるる異のゐれ宮

右　　家澄

ゐをれゐをを書まををうなひきゐれ野辺きれをしぬとれ源氏
左右ほゐを感氣

判云左の異れくの里右のとれくをの原せゐ異むゐ作へし
蓬ゐ用し紫れゐも野ゐきれを作くとゐひ書まををうう
靡ゐれをを野ゐうゐをぬとゐくれ西方れ野勝劣ゐを
ゐくゐくゐ作ゐ仍指ををへし

廿番

左　　ゐ家朝臣

ゐきゐを庭ゐ籬を野ゐを死しをゐををきあの作くをれをもゐ

右　勝　　澄信朝臣

夕波ゐれむゐ思ゐをゐ吹風ゐまゐ〳〵ゐをめぬ花ゐゐゐく

左方ノ云野辺の秋はいかなるいろとかきまく
よりて

左ノ云草枯頃宜哉

判云左歌聖子をんなとうて八庭を野辺さし雖ハおらん
事いとあはれむ右歌村雨ぬらひかやいへ秋よりはや
物色ノ拙を作きなくやはやを雨を行迷と花の春をきあの秋
なく拙よろしくを色を覚侍りて心可為勝

一番　秋田雨　雲逸

左

ぬれぬれと色ちる山の庵は春ハかくそのの神のしるしを

右　勝　経家卿

ちるぬさふ秋の春をさしをつるぬるひかそちをふ秋ぬれ

右方ノ云花の初文字下れるけあををそ八字如何
花方ノ云右歌めりて侍なり
判云花歌ひとをを所ふとも春うて雨の秋を
とをりへ迷を神の雨迷きれを庵の春ふとわてそきあと
物まは雨と彩をそよりとをもみしされうや右歌を
行侍ハ秋雨とよめりまきれへくや

二番

左　定家朝臣

ゆくえをを秋の思うせられめるひとを雨なひく雲れをちうと

右　勝　信定

日をうをへを秋は歌ノさ侍ふなり可雨をきをし夕暮の雨
右方ノ云右歌雨れとちかをさそをそをうをみをくや

左方申文後一を来る不伺見不審

陳云来也又弘云強若来詞者よりを

判云左乃言代とらう〳〵者小くき由云事人申一云こゝ所の伺

らん代を名事人乃申一之旨与不存申一也者を依退一

伺事強て不強別釈乃者や右所為をきゝものよろしく

こそ伺めれ事うきいきとやをうん伺まこ一れ

ほと乃詳とをうこうもやなとこうを右今ゆも伺めま左事

下句弥うれて一右可為勝

三番

左 勝 五家朝臣

秋の夜を宮うつゆゆゆ乃めしきれ神乃まこう

右 中宮権大夫

みる夜も宮うつゆゆ小れとゆ左て抜ゆ秋のあを事をそ一れ

左左を可弘事一之由一云

判云首限所を可一よろしく伺又上句大略お似て伺を左

下句れ毋の見みし伺ゆ乃ゆ左勝う伺へ

四番

左 道家朝臣

いけ一への人をくゆも秋乃釈れ宮うつゆをばしるを乃

右 勝 前大僧正慈円

打ちの文松の限ゆあ宮物をまとうそふゆ秋乃むゝ所め

左方申一云左事一右乃人れあ乃物を事ゆも伺事を事ゆも

こそ一ゆ色ゆをれ人成をくと云伺くゆ文ゆく

左方不弘申一

判云左歌人とをくといたれども上陽人乃ゑ様なとをうハと
をとをのられ侍るんさしををうふ舞ゆをいのしゐ
舞来白雲うちそゆる秋のひゝゆゑなをよろしくをきこえ
侍へしい左可為勝

八番

左　勝　女房

ゆくゝをゝ小萩のりとの庭ハ雨と今萩をあきのうへ小ゝくゝ

右　澄信朝臣

萩原や野へ乃秋り殘すゑ小てゆひ〻さをふれ村雨あれゝゑ

右方ハ云左方ひ〻をを小萩のりとゝ侍を萩乃うへ〻をゝる

小ゆゝりとをきてゆ

左方ハ可為勝之四ハ

判云左ゆゝりくゝをゝひゝるををとをれのりとゝをゝ左と萩ハ
たきの音をゝるをゝりをきあゝゝりゝといハ事不可及歟右
野へ乃秋風来分てゝをゝとを侍なるへし来白ゆゝりゝ侍歌
といゆゝる詞字剰ゝの事ゝあゝらゝくゝや左乃萩ハ
うへ小きくゝまるひまさををゝ中ゆゝくゝや

六番

左　持　弘昭

小ゆゝ侍かりゝゝの見世成ゝ侍まくゝに民の神ゝへうををほひまゝ

右　羅達

こりををさくゝかゝさ山陰ゝ見くゝゝ見ゝ成ゝ侍ゝ見ゝ成ゝ侍

左左ゝ不弘ゝ

判云あゝの山ゝ侍音優ゝみゝし侍ゝとゝりて左を殊右風ゝを侍し

まことやの文字まくらの詞やよをくはらんの歌なんと
かうやの色うつりたる花を踏うしなはれぬとをいひ
そそろ優なる色にさくし花も民の袖ぬれとをいへり
ふるしくさこの色をすゝ色て指とすへし

七番　秋夕

左　勝　　為家朝臣

秋のなをと雁のまつのさに庶幾て花もつ色はきゆふ色をるとをう

右　　経家卿

ををとをしのはをよをそへ香乃ふるうをふ所此哥なゝん
右方ハ云花并花りをいへ所りの字なにるのみ夕をる
ゝをとをそそろをもを会やや
左方ハ云石方あをれをを庶の哥なゝん此哥よをくや

又ををのなくてのあひをとをうをゝ
判云左方夕やをうをををふう雪ゆ連を花をのも此字をひこ
をうをてをを雪を為連上自此哥も優なりへし右方へあひを
必をもををとをををををををのはよをいをををくらう似
ををて左ををくはらん勝をををし

八番

左　勝　　雪連卿

夕雪うををの花ををも連をををれぬ袖をもをの乃ふをく

右　　澄信朝臣

雪をの乃文ををれうを雲よ嵐をををををををををを雪を
右方ハ云花并秋の夕をよをんをををを連をををををを
をををををををををををををををををををををををををを

左方中一云左番うたを墨染うあひさる事なり秋夕の
氣色もいふをくやく
判云左後しうゆゑ旁ふとうるさきりへまとも出の哥
なるへしたゝこれうもくみうの詞あ所色りゝを出歌
うめとせいは左為勝 紹

九番

左 指 弘昭

秋といへはつゆても袖はぬれなきはゆふ風ぬたの海とのの文

右 中宮権大夫

袖ぬれ秋をあを色とを分ともぬれつるゆふさくれうれ
右方中云左番たゝまとれ文ををうなくや
左方中云左乃うを袖をみとりひて行事とをさくて

文ふくれとをうるといふん事ぬ行
判云左番たゝ月とのの文をりふなくをさこの歌をもけく
かかしの所へ文ををのふすやはらんたふをのうをを
秋そうなり文を繁しぬくやいへれ番なをとを思ひ出く
うやうゆゑふとうをいくををはらんをくしゆふさくれ
うれといはるを袖白やはや今すありけりふ色りゝんたゝまを
乃文をはをうふ係うはるすや袖とをくや

十番

左 勝 之家朝臣

ゆふはれをそくや下紫のやをりゝて春ハ袖よあきれよう殿

右 家隆

等釣を野人を月をれるよ春なみうて虫乃ねよなる庭れあきらふ

右歌中云花の下紫といへる程来とそうぬ程を何世ゆゑ
花方中云花の歌波茂の出る所成る程よきこゆ又野亭
野中もあるゝ歌歌中花をもてかをむみしをとて歌へもとも
ふといへ歌いゝ
判云右歌は萩といたんたためかを上る上紫なるいふ歌ちを
うふけれ事ゆや似そくやうに歌中みをさしてりく
きらめらん右の波茂をもをやくしてもりの秋なる
やう成といへらん歌のもとかなるさ風をもを侍らん
又野亭乃歌なくて野亭方なる歌をのれ不なの歌へし
歌花うゝやう難不被其心歌句よろしく可為勝

十一番　左　持　女房

右
さても西きいふのすへきあれうさ成思ふ歌は秋のゆふ景
花花を中宜之由
判云歌方は秋の夕られ方くひうつて宮中ひとをうを侍
めき花上句ゝ歌やを神ふをくと云右下句思をつれを
秋乃夕景とゝへ歌勝劣ふる紀ゝくく侍を強てゝつれ
まさきをいゝゝゝて侍らん仍持とを

十二番　左　勝　定家朝臣

秋よゝ歌ゝ歌ゝめをてゝを出ふまゝは宮なをのメとなをて
右　羅蓮

なりめ行る物ちの秋ぬ哥信て松風うなるゆふくれのそら
左右ほゆ一番経之由
判云あの左右も心詞ほとなくさみしゆと右方ぬ行ちの秋
のをとつれ侍らん程も松風吹すやゆ色うらんあの松風
かなる心しそさぬ乃十番のゆうひすやもれねなる
庭乃波ぬ世と侍ゆ侍るちを侍ぬとほうやを松風を
侍ま花餘情あ所すや侍らん

十二番　秋田　左　持　左家朝臣

山田のるをうるあこみ田ぬ侍てゆむ秋ぬ侍ちを警すや
右　経嘉つ
吹ぬほとなるあの音を絵をゆを風のりほ侍ぬ山田るをうり

右方ゆ云を持那ぬ
左方ゆ云右哥初文字よりつ
判云左哥ゆむ秋ぬ侍ちとりへるひをこをを松風をす
老翁ぬものを侍すや右云吹ぬほをとうゆ侍めいる
より侍ぬすをてそ侍ぬ侍れと云あの秋ぬ侍ままほうく
くや侍なく可ゆすや

十四番　左　雫遊つ

あを遊ぬをちの山田ほ侍ぬ秋ぬ侍てゆのうふひなの音ぬ侍ちする
右　勝　中宮権大夫

いけやをうち秋ぬあをれをぬうひきていふをれ風の吹てくを
右ゆ一云左初文字いふうやきこを

左方中一云左衛門督可然哉事

判云左ハとちの山田ひたの高橋のうきはしを

田歌代衛門督きこゑ吹所くもかとも所よけれ侍へし勝

へ天にしそ侍めれ

十八番

左　勝　弘昭

音聞の音うひこうつ音きけを所きこゆるや秋乃小山田

右　羅遠

風吹を山田のいなにをとつれて稲葉う人をとろ所しける

右方中一云左五番和

左方中云右衛門人をとりるいうん

右陳云人をかと詠すひや

判云左音をよひこうつ音所きこゆる秋の田をとりるたを秋

風音うをとつれて稲葉人とも也所詠逸興と

思余情侍れ右ハいなを葉人をとりうんるいうときこゆ

左すあ一所きこゆ侍うん

十六番

左　持　道京為長

秋田守衛ういりりに所をとうんきてとあの世をとりすあそ

右　家隆

深うゝぬ山田のいなも秋をなをむりをそこの色うをとりう

右方中一云左衛門意欲まきこゆや

左方中云右ありうをそ

判云左方所やうハむかとりて八優かうう侍め是伊勢物語

なとおもひかひらもんともいふべきもうハたりやうの作者
さなりせいらん事ハ中こなりるまゝ也右歌もむあり
しきみしの作の歌しくらねとりんれやいうくとあ不ハ作
連と指なくるゝや

十七番

左　　定家朝臣

つく〳〵ゝ我ともあるとをあくるを門田の吹稲葉れ田の秋乃ゝとゝれ

右　勝　　信実

わ爪てかといかりる神のたゝりる稲葉のようれ秋の田ゝ
左方ハ云門田吹ゝ稲葉れ田の秋乃ゝとゝれ
とかりひきるゝや
左方ハ云左歌ハ宜之由

判云左歌ハ左方歌ハ言葉なるてし右れうこと心詞ハ
来自なく殊可庭歌之所なるへし可為勝

十八番

左　勝　　女房

山ゝ寺門田のすゝを雪ゝ消れてかるゝこゝろ上ハ
右　　遠信朝臣
夕ゝくよりのめく新もあを連るゝいかゝの田を神ゝ迎ひて
左方ハ云左ハ宜之由
右方ハ云右歌ハ可孤事
判云左のゝ的ハ月左ゝ夕ゝく秋ゝあを連もあるく見侍る
しかてハ門田ハ来ハ雪を連とゝ人ハ侍るゝ殊彼ハ心
侍りかゝまゝ左ハ月のなを不ハ山むゝ雪を多くを

うゐ山道と部不可庭賞之方もゆらと山吉とをけらる字
しゝみ除名うゝみしゆりむ可為勝

十九番　鳴

左　弘昭

あま拙たうせのうとに左田名乃羽音もそくやゆうられ野くなり

右　勝　中宮権大夫

あま道ゆと荻吹風のをと乃このうゑの月よ志ゑをなくるゝ

右あゆ一云左寄一秋樂うゝ数ゆ気ゆられといるゝを略と

ゆ簡してあも拙うゝをうゝすやそくやゆ荻猶寄なと

なゝてをよせ不なくや

左方一云上句優ゆもさゝふゝを

判云左方あもまゝゝの事左方人ゆて侍めうゝやを

初代秋夕の荻寄れに不波耳ゆ侍をたきの羽音ゆを

ゝり不なのれ色一左云初又字をあ一のゝ子へくやを中れ

のをのゝそくゝ初一色侍連と左ゝう勝ゝ侍ゝめ

廿番

左　勝　定家朝臣

唐衣すそゝくいゝのたひまゝ神ゝゝたきの月ゆゝすゝ

右　信定

摺衣秋ゝのあを連とりゝをゝうゝたきを野へ乃あの波気れを

右あゆ云左云略のまゝれ衣乃事と求ゝゝ行の所めゝ

左方一云あゝれ白ゝゝゝゝ如行

判云衣前之歌左左ゆ之旨例の事なへて神ゝゝたきの

をいゝんあゝすそ野代書といんとそも唐衣りゝめ

たらんゆへなくやを右略有所へといをんとそ枝その
あをきもと狩のふといをん又不可及歟尤似被略れ
せん人社よろしく侍るや可為勝

廿一番

左 勝　長家朝臣

時志もあまた秋党のもうし志きまさて秋乃夜とのふかあつむらん

右　経家卿

ぬぬともやおすし心よいろくらん月雨乃志ささも今そちを限りて

右方申し云左歌のてあ月むらん物ろくもうえさる事
きれを苦よりくるを

左方申云右歌松と云疑あもつすいろく何事そや

判云左の時雨秋れあそれ々のふかあつむらん不をねれの何も

あ月れ乃し松葉ふとの心ら色志侍と右の月雨乃時雨稀於
のそして同心よいろくらん事しけふゆへ思つ数へし左
すあしやすさ乃侍らすん

廿二番

左 持　季経卿

ぬのくれ枝そるすへぬとや松りしや秋それ雨升よ志さうちとちと

右　隆信朝臣

あけゆるうしよのそ心しそ稀やもて秋の月のる深葉れさと

右方申云右歌荻原や秋見中も雨升とよめ社證歌や侍らん
自なき秋の風のりし色耳なり左

左方申云御方秋葉を今すあし輪すや云なくりしたうむ

判云左歌し證歌ハ俊成とれあく俊成り雨治也と若道深思

ゆもの所作をとりあつめもすめるを四井とそいふも
化するやと思ふ作者右番神祇部の日ぐりを優ぐ作りと
月ごとに深草を詠まれそのうさぎぼを略を只深草と
さくをを山田なくまて作るんうもれ番ハ優ぐ
ゆうを花石せの作ふ作ふ指とをへし

廿三番

左　勝　兼宗朝臣

いかをへを孫ひく略や左ゆうんまくぬやぬ旁の月ぐうへ

右　羅達

ゆのうふも略のいゆのうを四なるぬることるまれの祢受ふ
花石せ中一番指歌之四
判云面前せふ歌なりとを作め進と対る番をハふろの月

あを色ふとのうれをるやときて四花と上句をを略のゆ
ぐうりうきうを四なれ他事あり作ぬ歌ぬたうひうう
るやを初文字なをそいふふう作進と勝とをへし

廿四番

左　勝　女房

波よすう海氏あ一色をゆりひて風を左なる志きの毋うを

右　家隆

ゆゆうをそうを左志きの一うを志をゆくうりを義ををうの
右方ア云左方云風ようくむをうのをうゆうをうゆうをくや
左方ア云右番志丈を毋をを城ようを見なりうりれ拝
とを波さうりうをとよまんいくく
判云左番歌風ふくむうゆうをゆうをのふへうを

たきのはりまぬとろうやを吹くるうん佃氏云々英意
乃鶴が島かとの心やさしたの弁海左略とをりのなる
略ゆり花は芦色は略まさるへくや

廿八番　廣澤池眺望　雪經つ

左　勝

なのめやろ心のそそをひろわさの池ちをちに出る月の

右　中宮権大夫

ひろ沢の池まをとをむ月新乃高羽の山うたらはれれる

右方申云花はうこをを指那

判云右乃眺望あ不をに歌くを指てしい花為勝

廿九番　定家朝臣

左　持

ををこををはりう迄ををのあ遠世月をそ乃称ひろ沢をしいけ

右　雅氣つ

くをををなく月をむ秋くひろ沢のをの池ををををを歌をる

右申云花方をををる月をうゆう称いく又眺望れむ

花方申云右を指歌

判云右弁迄をを月をうゆうねかをををたなくいけを

歌月を指らをを世右申乃歌を世うを指ゆう右弁池をを

ををなくいへれの眺望を指ゆう申ゆをみしめを月をむ

歌をく池をかをいゆをるをの字をもをやををくをかをの心

を世ぬ事をもれ月く眺望月なを申をを花を勝てしをみし

指ゆぬをうくらゆ申ゆを指めれ

廿七番

左　勝　　為家朝臣

むらさめにぬれてぬるゝかあくれめなのめにちかひしら海の月

右　　慈信法師

月のすむをいはうそみもうそらを眼しあれひ波沢の入け

左方申云左哥廣沢の月きよくうつるを

左方申云左哥眼ふあれひ波海の入の又ようつを

判云左ハひろさしの月又ようつをこそ思ふらひ

なのめにちかそふといへれそいふやうさ侍ら三ヶ世界

眼ふ重ねふと詩ようをいへくうつ侍連と云こと

きくよかうを耳もとこそひやひ波ぬをれうけ侍白

う侍へ侍ふやいに左勝

廿八番

左　持　　道京朝臣

ちるめやれ心のすゑをとまれとも月みをとのすひろ沢の池

右　　信定

ちるをれもぬるゝをあくれさうひをて月のひろ〻ヶ廣沢の池

左方申云哥詞の来をとまれとやりくれよろしくさうみし

侍と左れ哥ぬるもあくうちそひをてといる侍詞

左の哥れ劣とやうくれ文侍とを

廿九番

左　持　　弘昭

ひろちをの池さをとやうふはうの立文こをそしくおるをなり

右

月きよき都のそらの雲きえて松風をらふひろさものいけ

右右中ー与同歌

判云廣澤池さしつる月とも都まてしく氷とみしく

つく都北野の雪消て松風をらふなとあ物様

伺と月きよう右を詞なれとも歌よろしきもの

なりとくはるや枝おとやー色のうん

此番

左 勝 女房

心ちよみぬ苔しそうひ月ひろなのむるひ池さもの池

太 家澄

ゆくえなくなのひろ花もひろ花の池乃ひよすあ月れ

花花世世拾歌

判云花ひ月みなりとりひろ人れ下白よろしく侍り仍為勝

一番 左 持 苔 之家歌合

とれを末のたけ花を深ろ苔北文乃うくらさうをを下葉やハ

右 家澄

ちるぬうり緑ーたたろ山路うれ岩梅の清ろ乃文うを北花

右ー云たけをを深ろ空清くりるとれをおれ緑し

ろ拾ろきを

花方ー云ぬやろといるるひ物歌ー

判云花をたけをとうむるはたの文乃やいへれあくやを

歌白ろうれ下とろ迷ろ侍めれ右ー乃たとれもいく

を指とをくや

二番

左　弘昭

みるまに花もまくらかをくるふこゝのうちのこゝろの

右　勝　信定

年成色を尋るむもゝ花くらるの形ゝ秋あるほたのいろうれ

右方ハ云こやをよめる作はれ國のこやなるハうちふなな

又只こやなるハさやうゆゑ優すや

左陳云こゝあやゝと小弘と云事ハ考れるや

左方ハ云むも多くを寺なるいへれ波ゆよりうを

判云左ハ乃ふれこやなるて只こやとよあらんと事ハ常の歌

とゝう覚を侍ゝ称禮ゆゑをすてもば云乃こやゝうふなく

やを右尋ゝむも花ゝ優ゆゝう給連ゆるるやを寺上本

ゆゝして即事ゆゝと詩ゝ明ゝを優ゝ給連ゝ幷ゆゝて殊勝

なるゝ花ゝやゝし小弘を花ゝよろゝうゝ西れうゝ人ゝ形

ゆゝ秋の形なゝれゝ色ゆゆ左の勝とすへし

三番

左　季通

ゝ月色ゆゝまるゝ作ゝゝを繁しゝて錦ゝゝ所をやゝくのゝさ松

右　勝　中宮権大夫

終ゝなくゝゝれる津ゝの文付ゝを繁ゝをゝらふ垣ねゝゝみる

右方ハ云ゝ月色ゆゝをゝといふ文字ゆゝれゝけあゝを

左方ハ云右幷ゝ為事ゆゝ不及歌

判云左方ハ津ゝ左ゝゝ錦ゝゝゝ右ハ遠称作ゝゝれ

紅葉とかこと色の心ばえ下句
孫子たれなれ引ゆ似るを右はりさうとかとをそえて紅葉
かこふらんの系孫よろしうゆへくやはたゆ勝

四番

左　勝　為家朝臣

ふり色ぬはのみとりおそ深たそをれのおもしろゆ
紅葉

右

ふり人ぬはのみとりをなりうしまる苔や紅葉志ぬ
右方申云緑うをふとはくあさいうをぬはたもう
ふうを

左申云右番例の作ゆ事多不及新
判云左右ふぬいくをくの美おなくを作意空左をれう

紅葉とかはをれうの心へふさ海の波ゆ立うしまる
はるやなくいへ里えんもわのぬ桜ふ異なるへしをふつた
の紅行事ふうんやは勝とをへし

五番

左　持　定家朝臣

あうのをの津ぬをふ野乃はう時雨ふ引たて孫ふそをれを

右　後信濃守

ゆきみ里を作たをふ野ふ時雨しをたの山ふそ紅葉成れを
左右を桜新之四申之
判云方をう津たをふ乃きの時雨なりをを左をあうのや
ふなく右をふの野ふの時ふとこくをわ紅葉ゆ勝劣申
四番とをへくや

春

六番

左　勝　女房

うつの山こえし蔦の路かりてはたのうれ葉に秋風ぞ吹く

右　雅經

あさちか庭の霜さへあらそふことの流れたえうち時雨つゝ

同前

判云左右とも歌詞はよろしくみゆ然るを右をあさちか庭といへるもやさしく下句の蔦のうち時雨らんいつくと覚ゆ上に左うつの山の路思ひ出てはたの枯葉に秋風ぞ吹さかりん遠山殊勝に侍る仍左を勝とすへし

七番

左　勝　春　兼宗朝臣

舟とめぬ人をあらしにいなみ川春のゝ里かり梁し[illegible]

右　隆範

春雨のむかし時雨もあらぬ袖をきりしにしらさる末の海の波

同前

判云西方の風情たる異なり然るを雲雀又是錦義に似たる[illegible]かりしに吹そといへる波不足なるにや左勝侍らん

八番

左　季經卿

春ひろくみし霞の末はいろのさえてもなるとなるそれ

右　勝　信定

山めくる秋雨の庭との春過ぬの梢ふみわけいろはみゆらん

右歌は二句云ふ末はさきもかく

左方ハ云我拙の初かえこ四とをゆの版事ゆう
判云左弁長乃をくとかをれのたゆ代拍陸岩りる景れ
拍のりとかと紙をきて拍乃為本五ゆ一もかとくきて四
家とをへ文繁乃間を拍といねるる遠さるて し右ゆ
れ一くも文こゆうをとうれと云詞の不可産実侍1
やくし左毎事不被耳心以たる可為勝

九番

左　持　五家朝臣

秋そ一いたの小野れいをとも拍の原よ為やをを
右　中宮権大夫
うををあくなそうを遠と拍ゆ拍ゆそれ秋のいろうれ
たゆ中一云左弁を拍勝れ

左方ハ云ようゆを又してけくや
判云左の秋そ一とをけるを詞のひれ一かゆむと
産業ゆるる為へし右ことすたおうれを出を思ひうれぬ
事小侍遠と又て作くるをとをいふ色ゆうをくし

十番

左　指　弘昭
拍陸ゆうて時為れを右津らんいをとてう初為本をう
右　後法朝臣
山たれのいをれ小野ゆ秋者て用ゆ文ゆ原ををうゆうれ
左ハ一云岩りく拍遠弁や侍らん
左陳云岩りく拍と作くゆくゆ弁を忽不受遠くし本業

ゆもあまさよめりかすゝ色をよまんを行雅

左方ー云左歌ー無指歌

判云左方歌ハいたん事ニ證歌ヲ無ニ不及理白れ

初紅葉をりしうつをを常八ゆうて偽ゆてとくゝく

偽めれ左ハうゝハ事もるれ歌ー成事ー初ヨ山ニなの

とをりうあ不ヨれうゝ事ニうゝきゝうゝ又理白も

無会なるゝしかをらふるかれ又指なゝ色くや

十一番

左 勝 女房

拾遺ゝもいろやまされらんをしの草秋ゆけうゝ

右 羅蓋

あゝまゝて拾ひしゝ拾遺のゆゝ人なにとれりひこむらん

右方ー云左歌ー無指歌

左ー云左歌ー無指歌

判云左ゆゝ里ゝて如行下白も行事ゆゝ

上ゝ左の森れ下草秋ゆけうゝ色といへれゝろしく

偽ゆ不及思惟ゝれゆ左為勝

十二番

左 持 宣家朝臣

時ゆのゆ宿ゆ人ゝよゆゆを川をゝのりゝう賞ゆくら

右 家澄

秋ゆうゝゆゝたのゝをゝ拾遺下草をくさしつ白やうむらん

左左世ゝ歌之由ー之

判云左ゆゝ人ゝゝゆを川なくいゝ白ゝ安ハ優成ー

法白乃蔭や上白小孫子不相應ならん右下紙そくさの
つ白や深しといへば上白は持を呼ぶうむるかともなく
て下紙そくさの菊のなかれあるむ事いうしたりのうしゆく
らなと勝ぬくや

十三番　九月九日

左　持　　弘昭

かきはうかさけのそうそくの文をてらやを白妙に神
　　中宮権大夫
右

長月のきふ九日といひつかうれをまてゆうちくの乃
右方ハ云そのさくをは不霧
左陳云菊和菊也菊和を好莫又仍莫重云也
右方ハ云菊菊菊ふうひとりへれをれいうひのひ也

ひれをををなくふれいをうひる咲をくをとふの
左方ハ云右寄を為る事
判云左寄ハ持いをうをふ也寄れをうて只通りをを
色ハうの菊和重ハ由を以右方ハのなるて俊新
物語も莫なる一本菊をあるをしかとやて侍ぬり
又右方歌ハ万葉集のうかひとりへれ事ますやとやも
他を理の右寄ハ事を侍をいうひうにかとを不可庭
歌之詞うハ侍へをうのをく代和の沸呼のをのなる
證不勘之間を可新一説　変事なくますや

十四番

左　勝　　五家朝臣

をうのへん世紙也月のをふうをみ菊をつをてを年紙沸むへを

右　　隆家卿

たちの世をもふかむ菊にてくゝ春は花にとりて関とゝかたよまそよ

左方申云左番受持題

左方申云左番俊頼朝臣松のうへをゝくゝ春は

といふ哥に似る

判云左為勝負しかしなから字上下ありたしそ勝負ゝ

十五番　　兼宗朝臣

左　　持

きふとりへくしやそまのきの白菊うゑしハの神とみしきれ

右　　家隆

ちの所ふれうゑる今日は新しやうろひうひる白菊花

右申云やそ海の気ハ所ゝ所ゝ

左申云さけ盃ふうのうんにうてゑのうろふ撥よ

きこ白ゆ

判云左やそ羅のやりへらん通くやそ石又盃ようふうろ

うろふといゑるそのうへをとろなく字ゆ持とを人きろ

十六番　　定家朝臣

左

いわひときて程なの月とちきる武蔵ふ所む菊は来のたろ家

右　　俊信朝臣

勝

たちのへん世成長月の町さしとそたふ打是ろたゝくハ

左左を持題之也申之

判云左番於詞を俊成へし石ふをふたりと是ろくなくいふ

秀句をしゝりて不堪業を俊連と左を只ちのちきゝ

あやめたかきそなれいとひてゐる勝と宮中ゐて

十七番　左　持　　季通つ

ちはやふるかみのいせのうちやまにかすみのたなびくと霞の名ふうの色てそみる

右　　寒遠

ちはやふるいとひよる蓮とつくそなへて秋も限らぬ花とそなめ

右方中云左寄を持歌

左方ア云右寄いひなをきてもはやそなす

判云左春秋よりとめく音といへるもせ殿ゐ名ゐて霞代名

おうふとそ行事めり酒と流霞とそ中をせ只霞乃名と

いりのそ海とに寄よそやゐらんなを勝劣不分ゐるや

十八番　　女房

左　勝　　きのうへ小ゐ名ゐ中ゐのたちくそ人乃詞代花まそをゐる

右　　信定

ちはやふるハハ重ちく菊と九重にのさ孫迄もりそれ寄

右方中云左寄を持歌

左方中云右寄八重咲菊の九重小名ゐ代名白とと思ら

判云左右とも重陽乃心をたれり色ゐと左の人乃詞代花

少そありきる今すゐ秀句ありてゐらん

十九番　　秋新　　季経つ

左

ちはやふるまきさに新ていちそてゐる重ゐる氣名ゐ名れ

右　勝　　信定

紅葉ちる庭の深さも見えわかしうつもれにけり今朝は霜哉

右方申云左哥无指難

左方申云さそあらしとけるにく

判云左の女郎花といふこと見せんありきけりつてあるべき事

不及沙汰右又末の句文ならむ歌無力やならん右の風情

多與てきこゆ可為勝

廿番

左　持　顕昭

冬のこぬ鶉の毛衣りさみをはゆるともしらし秋のつゆしも

右　隆範

霜さゆるよもぎが下のきらくも野辺の鶉は臥やしぬらん

右方申云鶉は上毛なくてはしもみえさせ不似ある

左陳云鶉の上毛の思ひよりや遅なく袖をも猶一ありたき

てはさのミよまむことなれ

右申云蚕ときうんよ右鶉加速く不及事不能不盡

判云左方鶉は毛衣は冬霜よ冬のきぬとりくろさ疑申

へき右方さらくもの野も枯野は臥やしぬらんといへれ

鶉ときのぬ不似よるへきか左そ左の字由なけれや右上

句も優けるを下句詞不盡ときこゆ持と申へくや

廿一番

左　勝　定家朝臣

とけて寝ぬ夜路もしも不知をわしき定めける秋の心と袖

右　中宮権大夫

秋の野は千草の色も枯あへぬ霜をきこむる枕半のうつろふをも

右方中云左番しうふかひなし
左方中　右番　を持歌
判云左歌はをもしろきといふよりはをかしやの
右歌まことひろかをとをくをはるとをのおの
をとをくらられて物おもひて侍るやと聞けるうちに
侍左勝しや侍るべうん

廿二番

左　持　　藤原朝臣

虫の声はよをかもをちらく後世はかをかはを
右　　蓬

おりふしをきもをあはのさ秋のおりをりをとをの庭の蓬は
右方中云左番を持歌

左方中云おりをり歌をくはけり
右陳云つねををと云ふをよりのををくするや
左歌云ふををつねををこをりををくををしおよ上三をの
とりん事なをいく
判云左方上下句不相應歌右番はほとのるをさ紀乃
番ノ左番回ひや歌ををふをのむを聞ふして侍めれをを
左も可勝方あるをす持とををきすや

廿三番

左　　兼宗朝臣

初雪や秋をををてををきつるん今物をうを秋をちのをの原
右　勝　　家隆

いふまを秋をををとなりのめをて花をよをををを野人のあけりの

左右共に無勝負之由申之

判云左為野ちの方俊よりはじめ侍しかれども左方を無勝

さ為をいく程共無勝負別為と深しかるべきかの事なるべく

嘆をしたとこそ侍やはべらんん

廿四番　左　勝　女房

為むすふ秋のすゑたるの小篠原ひとりなびくを

右　源信為朝

月見ぬまはもるうつをそうへてうり秋乃すゑたるのまねのそう

左方申云為朝よこかれ所をあらそひ心をきこえすん

左陳云さしたる事やはべらん

左方申云すゑ広をなびくの来歌なり

判云左方秋の来るの字よりはじめ和歌うへ月の秋をけり

もしすくなくさこそ左をあはむをぬとをりしより秋の来

歌もとさこそ侍しとしてよろしく方左勝と侍しし

廿五番　善秋

左　勝　さ家朝臣

もの月の月もるかうるまぬれも秋善をつれゆふ夕をこれそう

右　経家卿

五ゆくるをなく秋や思ふらんそのへのくさ葉うおうるたのまる

右方申云為乃比秋善をいとうといふん事いく

左陳云夕やをの小秋のくれのあるひらのこすする也

左方云をなくとりの人所むゆさても学をよ為歌ういんん

判云左はうるとよろしく侍べし

廿六番

左　勝　　季経卿

はかなくも今年の秋のくれをしもあやしきまてに惜まるゝ哉

右　　隆信朝臣

暮ぬるを心ともまた秋の夕のゆくへの跡とめてなからん

左歌ト云左勝ト難

右方申云何條秋の夕のゆかん事を如何

判云両方申旨尤然ハ右歌の仍又以左為勝

廿七番

左　持　　顕昭

惜めとも秋くれぬとやいそくらんのこる人にはくれはまさらす

右　　中宮権大夫

あさましや荻の葉あらす吹拂て秋をおくりし夕暮のかすへ

左右共無指難之由申之

判云両人各無難之由申ニこゝろよし左の康高をそ人に

おくらん事ハ相似はかなくや右の荻ハ葉ゆらくをもいはれそを

思ひのはへらぬにや仍持とす

廿八番

左　勝　　兼宗朝臣

たひのまゝのそらをなかめて後の秋はあきまの空をしほりぬる

右　　家隆

暮て行秋もうらなくそうつめし夕にもゆく月の影とみしより

同歌

判云左ハまゝの比をとみて後そといひ右ハあきしりゆく月の影

とかくまよといへる歌は勝劣之様ぞ侍らねどきこえず
いつへる波まこしもこそ空に侍り仍以左勝と申也

廿九番

左　　　定家朝臣

まぬの名をとるまゝ秋乃月のけふよりまさてなく虫はなほあれ

右　勝　　　寂蓮

くれてゆく秋乃わかれも山のはにいる月とともにやあかぬ乃そら

右方申云まぬの名をとるまゝ如何

左方申云右歌無可難事

判云左歌は名のみ秋はなとさ可まし難せ覚侍らす月と
ともにや有明のそらといへるよろしく侍へし以右為勝

卅番

左　持　　　女房

龍田姫いまはのころの秋の風に時雨をいそく人乃袖かな

右　　　信定

あきはけるわかれはたくひなかりけり秋も今日の夕暮乃空

右方申云時雨といふ事無術

左方申云不庶幾之由

判云両方は今日の詞に秋を惜む心切なりてし而左方人も不庶
之由申右方人左者無術之似龍田姫今日の心乃余秋は内
ちかくなりやはさる程にいへとも右は秋も今日の夕暮乃
空も術なくても覚え侍らぬにや仍勝劣不分明

左大将家六百番歌合巻第三終

110X
355
8